九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

平成25年度修士論文・卒業論文概要

門, 悟
九州大学大学院人間環境学府 : 修士課程

鄭, 春紅
九州大学大学院人間環境学府 : 修士課程

朴, 玲河
九州大学大学院人間環境学府 : 修士課程

安達, 陵人
九州大学教育学部 : 学部生

他

https://doi.org/10.15017/1498395

出版情報：教育経営学研究紀要. 17, pp.119-146, 2015-03. The Laboratory of Educational Administration, Educational Law Graduate School of Kyushu University
バージョン：
権利関係：

中国における重点校から模範校への変容と課題に関する考察

鄭　春紅
（平成 26 年９月修了）

【章構成】

序章
　第１節　問題提起と研究の目的
　第２節　先行研究のレビュー
　第３節　研究方法と本論文の構成
　第４節　用語の定義
第１章　重点校にける歴史的背景及び課題
　第１節　重点校の歴史的背景
　第２節　重点校における課題
第２章　重点校から模範校への変容
　第１節　重点校から模範校へ変容の背景
　第２節　重点校から模範校へ変容の特徴
　第３節　模範校の特質と役割
第３章　模範校の現状―黒竜江省の実態調査を事例としてー
　第１節　本調査の目的と方法
　第２節　アンケート調査結果
　第３節　インタビュー調査結果
第４章　模範校の問題に対する提案
　第１節　重点校から模範校へ変容の成果と課題
　第２節　模範校の問題に対する提案
終章　本研究の成果と課題
　第１節　本研究の成果
　第２節　本研究の課題

【概要】

序章

１９５３年６月、社会主義建設のために、重点校政策が打ち出された。しかし、基礎教育の領域の中で重点校と非重点校に教育不公平、学校選択風潮、重点校と非重点校との格差がますます大きくなる等の調和が取れない現象が漸次深刻になった。重点校制度を廃止し、かわりに、模範校を建設すべきかどうかの論争が起こりながら、１９９５年に国家教委は『約１０００校普通高級模範校を審査して認可する事に関する通知』を打ち出した。この通知は中国の模範校の誕生だと見られる。

重点校とは、主には進学するために開設された公立高校である。重点校は一流校である。高校と大学は教科レベルにより「重点校」または「非重点校」（普通学校）に分類される。重点校はさらに「省重点」「市重点」「区重点」と格付けされる。

模範校とは、「模範性普通中学」である。原語は「示範校」である。模範校の構築も高校教育を対象とする。小学校と中学校は模範校の対象にならない。模範校は公立高校だけが含まれるわけではない、民営高校、職業高校、民族高校と農村高校なども申請することができる。教科レベルにより、模範校または非模範校（普通校）に分類される。模範校はさらに省レベル模範校、市レベル模範校、区レベル模範校と格付けされる。

重点校体制の終焉に伴って、模範校建設が盛んになり、各高校は模範校になるために学校改革に取り込んでいる。しかし、模範校政策が打ち出されてから今まで既に２０年近くになったが、今日の模範校に対する呼び方を依然として重点校ととらえる人が多い、更に、重点校から模範校への変容は中身を変えずに名前だけを変更したという指摘もある。それだけではなく、学校建設の非経済的な規模、学校の経済基盤の脆弱さ、学校管理におけるルール違反などの新たな問題も指摘されつつある。特に、素質教育を重視している現在、模範校は従来の重点校と同様に進学率しか重視しないことの指摘もある。模範校は人々からの指摘が非常に多い。このような問題意識の中で、本論文では、一体重点校と模範校とはどのような歴史的な背景があるのか、一体模範校は人々に指摘されているように進学率だけを重視しているかどうか、模範校の進学率が高い原因としてほかにはあるかどうか。全国的な素質教育を推進する途上において、重点校から模範校に変容するうちに何が変わったのか。模範校には積極的な面があるのか、あれば何であるか、模範校の役割を一体どの程度果たしているのか、模範校政策の推進に伴って中国の高校段階では学校間格差を改善したかどうか、それとも、深刻になったのかどうかを明らかにしたい。そして、科学的な発展観を貫き、調和が取れる教育を建設するために、今日の模範校の現状（マイナス面とプラス面）を全体的に把握しつつ、打開策を探求することを目的とする。

先行研究において、まず、重点校に関する研究は重点校政策の経緯、重点校がもたらした影響、重点校改革への研究である。次に、模範校に関する研究は学校建設の非経済的な規模、学校の経済基盤の脆弱さなどの問題が指摘される。模範校政策への指摘も少なくない。また、重点校と模範校

を同時に言及した研究においては重点校と模範校の価値選択比較研究、単なる重点校から模範校への改名の指摘などである。

しかし、模範校にはデメリットがあれば必ずメリットもあるはずである。にもかかわらず、模範校に対する全面的且つ客観的な認識を持ち、模範校を研究した学者が少なく、とりわけ、実態調査を通じて模範校の利害を指摘し、提案する研究はきわめて希有であり、それゆえに、本研究の意味と価値があると考える。

第１章　重点校における歴史的背景及び課題

第１章では、重点校政策を概観し、その課題を指摘した。

まず、重点校の歴史的背景を経済、政治、文化三つの視点から考察した。経済的背景としては新中国成立初期には経済基盤が軟弱のため、全面的に重点校建設には資金が不足状況に陥り、一部の高校を選択し、重点的に投資した。政治面では、新中国が成立初期、各方面のレベルが低く、社会主義の建設には人材が必要であった。したがって、1953～1966年の間、国の指導者の提唱の下に、中国は重点校制度の模索と実践段階に入り始めた。より早急且つ優秀な人材を育成することに制度的な保障と支援を与えた。文化的背景としては中国の昔からの科挙制の影響であった。中国古代からの科挙試験が長い歴史の中で清時代まで踏襲された。試験に合格すれば権利・財力･社会地位を全部手に入れる。したがって、この観念は根強かった。１９５４年から１９５５年の間には、中国全体の普通中等教育のレベルが低下、生徒の人数が不足、中学留年の生徒の人数が多い、高校卒業生の点数、特に理工系の不合格の割合は７５％に近かった。重点校がこのような背景の下で建設されたことを考察した。そして、重点校が特定の時代での貢献を指摘した。

次に、重点校が露見した問題を重点校政策自体の合理性、教育不公平と生徒にもたらした心身面の悪影響の三つの側面から考察した。合理性について、重点校政策を打ち出す前には国家指導者の呼びかけだけで政策の制定、公布が実施され、実行性のプロセスがなかった。教育不公平について重点校政策は「中華人民共和国教育法」第１章第9条で規定した教育平等の内容と矛盾していた。また、計画経済体制の行政関与の下で、重点校は十分な経費、優秀な学生の供給、優越な教師チーム、完備した教育施設などを有する。そのため、普通校の発展に対して、起点から既に不公平である。生徒への悪影響として、進学のため、生徒は普段大量な時間をかけて勉強したため、睡眠不足、運動不足などの問題が浮上した。また、重点校はエリート集中学校のため、進学試験に点数が足りないため高額な学校選択費を支払って入学した生徒たちは勉強についていけない悩みやストレスが生じ、心理的悪影響を及ぼしている事を指摘した。

第２章　重点校から模範校への変容

第２章では、重点校から模範校へ変容の背景を概観し、変容の特徴を考察した。また、変容後の模範校の特質及びその特質により果たすべき役割を指摘した。

まず、従来の重点校が露見した課題と相違し、模範校建設が学校の教育改革には促進作用があると指摘した。なぜなら、模範校審査の過程で、各学校が標準に達するために自校で行う改革は学校のハードウェアとソフトウェアの向上を促進できることを指摘した。重点校・模範校は各々異なる時代で成立した。その時代に適応できる学校建設の形である。したがって、中国の経済の発展と共に、経済生活レベルが向上した民衆の追求は衣食が満ち足りることではなく、むしろ精神面と知識面の向上である。特に中国の一人っ子政策が打ち出された後、親は願望を一人の子供に集め、代価を惜しまない。しかし、従来の重点校の数がわずかであるため、全員の要求には答えられない。また、計画経済体制下で発展した重点校は社会主義市場経済体制の平等、民主などの観念には不適応であるため、重点校から模範校への変容は時代の要求だと指摘した。

また、重点校から模範校へ変容の特徴としては、学校経営の目標が重点校時代の一部の学校建設であることから模範校時代の高校段階全体の学校の質の向上への転換であり、学校経営のパターンは重点校時代の政府の指導を主とする単一なパターンから、各学校が自主的に運営し、新機軸を打ち出し、特色ある多種多様な学校建設へのパターンへの転換であった。そして高品質高校の教育対象も学生募集枠の拡大、あるいは高品質高校の数の増加の形で少数エリートを教育対象とすることから大衆向きの教育への転換であり、高校に対する審査は一回の審査から複数回の審査へ転換し、高校段階に教育理念も受験教育の「智」しか重視しない理念から、生徒の徳、智、体等多方面発展の素質教育へ転換したことと考察した。

次に、模範校には模範性、波及性、標準性があることから、国家の教育政策を貫き、学校建設の役割と学校管理、カリキュラム研究、教員チーム建設、道徳教育などの面では良い手本とする役割及び脆弱な高校を支援し、学校間格差を縮める役

割を明らかにした。

第３章　模範校の現状―黒竜江省の実態調査を事例として―

第３章では、これまでの検討を基に、実態調査を行った。（調査時期２０１３年９月、２０１４年４月）。

まずアンケート調査については、(筆者の故郷)黒竜江省の高校から２校の事例校を抽出した。この２校はそれぞれ黒竜江省の模範校の中でもトップの学校Y校と普通の省レベル模範校を代表とするS校である。この２校の３４０人の生徒（高一から高三）を抽出し、アンケート調査を通じて、模範校の現状を把握する上で、今日の模範校への評価、受験教育から素質教育への変容の現状、模範校における教育平等などのことを明らかにした。

また、インタビュー調査については、主に模範校の政策面について尋ねた。黒竜江省の教育行政担当と抽出された２校の学校のリーダー及び普通高から市レベル模範校に昇進したW校のリーダーにした。このインタビュー調査を通して、調査対象となった３校の模範校になった経緯、重点校から模範校へ変容の理念及び重点校から模範校へ変容の課題を考察した。そのうち、重点校から模範校へ変容の理念については、一方、模範校と普通校との連携を通じて、普通校が模範校に昇進し、そして、これらの模範校が学生募集枠の拡大を通し、より多くの生徒は高品質の教育を受けることができる。他方、これらの模範校で受験教育から素質教育への変容を行う。以上の方法で全国民教育レベルの向上を図ることを明らかにした。

以上の調査結果として、Ｙ校とＳ校全体の結果から見れば、同じ省レベルの模範校間には学力面では格差があると指摘した。さらに、インタビューを通し、学生募集枠の拡大による省レベルの模範校と市レベルの模範校の学力の格差が大きくなったことを見出した。

Ｙ校とＳ校の生徒に対する自校の名称の認識の回答が重点校の回答が多い原因がインタビュー調査から分かった。つまり、国は重点校名称の廃止について正式的な文書がなかったため、重点校と模範校との名称が混乱していることを明らかにした。

アンケート調査を通して、Ｙ、Ｓ両校の生徒の共通問題である進学試験による素質教育難航の問題を明らかにした。そしてインタビュー調査を通して、学校よりも保護者が進学率を重視していることを明らかにした。また学校に対する満足度の回答によれば、模範校に対する満足度が高いが、その中で最も満足なのは進学率であることを明らかにした。生徒学習時間、運動時間、睡眠時間、学習に対するストレス感、生徒が希望している大学の名前から見れば、生徒が自ら進学率を追求していることが分かった。以上のことから、得られる結論は模範校が重点校と同様に進学率を追求しているという一方的な批判は正確ではないことが分かった。なぜなら、進学率だけを追求しているのは模範校ではなく、むしろ保護者と生徒である。これは、素質教育の推進には非常に不利だと推察できる。

また、今日の模範校は道徳教育を非常に重視しているが、道徳建設には体系的にはなっていない。今日の模範校に対して特色を強調しているが、特色が顕著ではない。調査対象となった２校の生徒の家庭状況は裕福層の割合が圧倒的に多いことから、模範校の教育公平問題が存在していることも指摘できる。

重点校から模範校へ変容の成果は以下のようにまとめられる：各模範校は生徒の全面的な発展を重視し始め、それゆえ素質教育に取り込んでいることを明らかにした。模範校審査の面から見れば、単一的に進学率を審査標準とせず、学校の全面的な審査の内容となった特徴、模範校制度の終身制ではないことを検証した。公平面では、政府が学校選択費の金額を限定している。このやり方はある程度裕福層と貧困層の高品質教育を受けるチャンスを平等にさせたことを明らかにした。また、政策面では従来の重点校への財政投資と異なり、今日の模範校には自主獲得をさせる。これも重点校から模範校へ変容の一つの特徴だと指摘した。重点校と普通校との連携過程で普通校の学校管理面も模範校の良い参考になることを明らかにした。

第４章　模範校の問題に対する提案

第４章では、模範校問題に対して提案した。

審査の段階で、真実を求めるため、地域、保護者、生徒との連携が必要であることを指摘した。

監督面では視学機関からの監督だけではなく、模範校間、ひいては模範校と普通校間で相互監督し合う必要性を指摘した。

学校間の格差を縮めるためには、まず、各レベルの模範校がペアを組み、連携し、連携の効果を評価し、効果が悪ければペアを組んだ両校とも責任を負わせるべきである。次に、学校評価、学校情報発信などのプロセスでは進学率主眼から特色ある学校建設主眼への変容である。つまり、宣伝の内容は進学率を宣伝することから学校の特色の宣伝、学校建設の理念の宣伝、カリキュラム

における改革ビジョンの宣伝、成果を収めた経験の宣伝へと変容が必要であることを提案した。

特色ある学校建設に対して十分理解する上で学校の裁量権を拡大し、生徒のニーズを聞き、若手教員のアイデイアを聞き、学校外部からの声を聞き、特色ある学校建設を提案した。さらに、特色ある学校をつくるために校長に権限を移譲することについて、校長の道徳素質に対する要求が高く、校長登用の慎重さと権限移譲した後の考察も必要であることを指摘した。

道徳教育については道徳教育の案を具体化且つ持続化し、道徳教育の理論と実践との融合、徳育評価の健全化を提案した。

素質教育の推進については教育行政部局とその下の模範校とのコミュニケーション不足のため、下達した政策は模範校では難航することを指摘し、教育行政部局と学校のコミュニケーションを重視することを指摘した。つまり、学校側が上からの指示を受けるだけという受身の立場に立たない。むしろ教育行政部局へのフィードバックが必要である。教育行政部局―学校―教育行政部局―学校というやり取りが必要だと指摘した。また、保護者と学校側の信頼関係構築の上で、家庭、学校連携の教育型が考えられる。

大学入学試験を改革し、試験科目を減少し、その代わり、試験の内容は各科目の関連性を強調する上で、以前大学試験成績にない実践、体育なども入学試験の内容にする。例えば、体育の成績を大学入学試験に加えれば、学校側と生徒、保護者も生徒の身体上の発達を重視するようになると指摘した。大学入試試験の成績構成は高一から高三までの各期末試験の和を一定の割合で換算すれば、ある程度、成績の良し悪しの偶然性を免れると提案した。

終章　本研究の成果と課題

従来の重点校創立の背景と課題を明らかにし、重点校から模範校への変容の必然性と特徴を明らかにした。今日の模範校への実態調査を通し、そのメリットとデメリットを指摘した。そして、今後、模範校建設の改革及び中国の高校段階の素質教育推進の方向について提案した。

今回の調査の対象は黒竜江省に焦点を当てた事例校であるため、重点校から模範校への変容の課題が全部包含されるとは限らない、それに対する提案も全面的とは限らない。特に、本研究の提案部分は調査の結果も踏まえてはいるが、筆者個人の考えのため、合理性、妥当性に欠けることもあり、応用可能性に関する検証が必要である。

【主要参考文献】

・『国家教委は約１０００校普通高級模範校を審査して認可する事に関する通知』原語：『国家教委関与評古験収１０００所左右示範性普通高級中学的通知』、1995年７月。
・八尾坂修『学校改革の課題とリーダーの挑戦』ぎょうせい、２００８年。
・文部科学省『諸外国の教育動向』明石書店、2012年。
・王ウェイ起「重点中学から模範性高校への転換研究」原語：「従重点中学到示範性高中的転型研究」湖南師範大学修士論文、２０１０年６月。
・金紹栄・肖前玲「模範校の模範でない現状に対する考察」原語:「対与示範高中的『失範』現象探悉」『宿州教育学院学報』第９巻、第５期、２００６年１０月、ｐ．４０。
・向秀清「重点中学から模範校まで―高校教育の均衡化、高品質化を論じる」原語：従重点中学到示範高中―也談高中教育均衡化、優質化発展」『中国科技信息』第１５期、２００５年、ｐ．２０６。
・向キ「模範校の模範作用における再びの検討」原語:「関与示範高中示範作用的再探討」『吉林省教育学院学報』第２４巻、第１期、２００８年、ｐ．５１。